

AJALT

2015

ASSOCIATION FOR JAPANESE-LANGUAGE TEACHING

私とことば

林望

Language and Me
Nozomu Hayashi

NO.38

特集 | Feature

Performing Arts
and Language



演劇が日本語教育をもっとイキイキさせる！

野呂博子先生は、演劇の力を第二言語教育に活用することを目的とした国際表現言語学会の運営に、発足当時から事務局長として関わっていらっしゃいます。演劇とコミュニケーション活動との共通項を浮き彫りにしながら、演劇を日本語教育に取り入れることの意義、実践の具体例などをご寄稿いただきました。

州立ビクトリア大学准教授 野呂 博子

プロフィール/のろ・ひろこ カナダブリティッシュコロンビア州立ビクトリア大学太平洋アジア学科准教授、国際表現言語学会創立メンバー、事務局長。1987年から「楽しくて役に立つ」学習方法をモットーに日本語と日本語学を教えている。会話能力を高めるために、自然な日本語を使っている平田オリザ氏の演劇作品を活用している。



はじめに一表現芸術や芸能の持つ力

日本のポップカルチャーが海外に広がり、世界中で受容されていることは多くの方々をご存知だと思います。私が在住するカナダ・ビクトリアでもゆるキャラグッズを持っている若者を見かけたり、人気漫画の英語版が町の図書館の青少年コーナーに並んでいたりと、日常的に日本のポップカルチャーが受け入れられていることに気づきます。また能などの伝統芸能が上演される機会には日本人以外の聴衆も多々見受けられます。もちろん、スタジオジブリ作品に代表されるアニメの人気は非常に高く、根強いものがあります。私は1987年から、ビクトリアにある州立大学で日本語を教えています。15年前ぐらいから日本語学習者の学習動機が日本のポップカルチャーに牽引されていることに気づいていました。日本製のテレビアニメであるドラゴンボール、NARUTO、ポケモン、セーラームーンを見て育った世代が日本発信でやや大人向けのポップカルチャーに惹かれ、翻訳でなく原語である日本語で生のポップカルチャーを楽しみたい、というのが日本語を学ぶ契機となっています。学生とジャニーズのどのグループが好き？あのアイドルが出ていたドラマがよかったよね、などと話が弾むこともしばしばです。また学生にお勧めド

ラマやアニメを教えてもらうこともあります。最近では本物を見たことがないけれど、宝塚歌劇が大好きという学生も増えています。

日本語教育の実践現場ですでにマンガやアニメ、テレビドラマなどポップカルチャー的な要素を取り入れていらっしゃる先生方は多いのではないのでしょうか。ポップカルチャーに代表される日本の表現芸術や芸能が非常に魅力があること、そして日本語学習の動機付けになるということに異議を唱える日本語教師はいないと思います。

本稿ではこれら表現芸術・芸能のうち、演劇・ドラマに焦点をおいて、なぜ日本語教育、特にコミュニケーション教育に役立つのか、その根拠について、現段階で考えていることをお話したいと思います。

第1章 一演劇・ドラマとは？ 一なぜ語学教育に役立つのでしょうか？

「演劇」や「ドラマ」ということばは分かったようでいて、誤解を生みやすいです。この二つのことばは同じ意味で使われることも多いですが、実は少し違いがあるようです。



(演劇って何？ドラマって何？)

「演劇」は、上演という共通の目標の下、多くの人々の働きから成立する集団的な芸術と定義されることが多いようです。俳優をはじめ、脚本家、演出家、照明、大道具、小道具などを担当する人々、そして最も大事な観客です。観客に訴えるものがあってこそ、「演劇」は成立します。

ドラマは演劇以上に多義的です。

脚本、演劇作品、劇的事件、またテレビドラマのようにドラマ番組を意味することもあります。さらにドラマセラピーや欧米などで盛んな応用演劇 で使われるときは、子どもの「ごっこ」遊び、もしくはRPG（ロールプレイングゲーム）のように、想像力を使っていつもの自分とは違う役を演じるプロセス・活動を意味します。この場合のドラマは上演が目的ではありません。自己解放、自己変革、他者の理解などの目的のために役を演じると言う点でドラマはツールということになります。

意味のあるコンテキスト中で行う身体的でホリスティックな学習活動

外国語のクラスにおいて演劇・ドラマの持つ有効性は

数多く挙げられます。

- 1) 目標 (target) 言語を用いて、意味のある、流れのあるインターアクションが生まれやすいこと
- 2) 個々の発音、イントネーションの特徴が、断片的でなく、インターアクティブで文脈がはっきりしている場面で学べること
- 3) 新出語彙、表現が、断片的でなく、意味のある文脈の中で学べること
- 4) 目標 (target) 言語を習得する上で自信が生まれること等が挙げられます。さらに 話し言葉に必ず伴う身振り、表情、間、話し手同士の距離などの非言語的要素も自然な形で学べます。特に感情は言葉で表現されることは少なく、身体を通じた非言語的コミュニケーションによってなされることが多いため、演劇的学習はいっそう効果的であると思います。また人と人との関係性ぬきに演劇・ドラマは成立しないので、その点でもコミュニケーション教育にはうってつけの学習方法だと言えます。

演劇・ドラマは具体的な場で起こる総合的で身体的な刻々変化する体験と言えます。しかし、現実生活とは違う空間です。演劇でのけいこやりハーサルを例にとるまでもなく、一度目でうまくいなくても状況が許すならば、何度でも繰り返すことができます。

足場かけとしての演劇・ドラマ的な活動

ヴィゴツキー(注1)は、子どもが大人や仲間同士での協同によって、自分ひとりでは到達できないレベルに「背伸び」ができると主張しました。それでは、どのようにしたら「背伸び」が可能になるのでしょうか。「背伸び」の仕組みは「足場かけ」(scaffolding)という概念を使って明らかにされました。足場は、そこにいるため、足を置ける場所のことを意味します。たとえば建築工事のときに足場は本来の目的である建造物を作るための作業を可能にするものです。しかし、建造物が完成したら不必要になります。教育における

「足場」の例は数多く挙げられます。問題解決学習の場で、教師がいくつかのヒントを挙げるのもその一例でしょう。

第2章 演劇・ドラマ的な活動の実践例

ヴィゴツキーの考えを大人の日本語学習者に適用してみるとどうなるでしょうか。

演劇作品を授業で使うときの工夫

15年前、私は上級日本語会話のクラスを担当することになりました。日本語教師の皆さんもおなじみの状況かも知れませんが、会話のクラスでは練習の必要な人が押し黙ってしまい、いつもおしゃべり上手な学生さんにクラスを独占されてしまうことが多いです。そんなとき、僥倖ともいえるべきことが起こりました。勤務大学の同僚がその当時、劇作家で劇団青年団を主宰されている平田オリザさんの「東京ノート」脚本の英訳を完成したばかりでした。何気なく紀伊国屋書店が作成し、販売していた「東京ノート」ビデオ版を借りてじっくり鑑賞したところ、その中で使われている日本語が芝居がかかっていず、本当に自然だったのに驚きました。脚本とその英訳も読み、これを会話クラスの主教材にできないかと思い始めたのです。これは90分の芝居で、同時進行の話がいくつも入っているので、そのまま学生にビデオを渡す訳には行きません。音声やイントネーション、間の置き方などにも注意を払ってほしいので、ビデオ上の音声では不十分です。また、聞き取り、内容理解のためにも、工夫が必要でした。そこで、俳優のセリフを音声、文字で何回でも聞いて、見られるようにCD-ROMを作成しようと考えました。平田さん、青年団、紀伊国屋書店から日本語教材開発のために自由にビデオ、脚本を使わせてもらえることになりました。また、数学者で日本語学習を趣味にしている友人にプログラミングを担当してもらい、何とか試作品を完成し教室で使ったのが、2001年の

秋でした。週毎の内容理解に関する課題を仕上げるために各学生にCD-ROM、ビデオを一部ずつ貸与しました。この課題の中で何回もビデオを見て、CD-ROMの音声を聞かないと答えられないような問題と内容理解に関する比較的易しい問題、また意見を聞く問題の3種類の質問およびあらすじを課題としました。

内容理解以外にも、毎週グループによるスキット発表が課せられました。スキットのテーマはその週で焦点となったコミュニケーション上のストラテジー、たとえば一週目はよく知らないもの同士がきまずさをさけるため、共通の話題を探す、そしてあいづちをうつ、かつ発話と発話をオーバーラップさせることなど、条件を与え、それ以外は学生の自由にさせました。「東京ノート」に出てくる登場人物であるプロの俳優のせりふまわし、目線、身振り、表情などをお手本とさせたのです。従来のコミュニケーション・アプローチでよく使われるロールプレーではお手本となるものが非常に限られているように思われます。素人であればいい間違い、言いよどみなどが避けられないのですが、プロの俳優さんの演技は、特に平田オリザさんの戯曲そして演出では「芝居がかかった」セリフとセリフ回しがなく、しかも言いよどみ、いい間違いがなく、自然な日本語を限りなく蒸留していった後のエッセンスともいえるべきものなのです。学習者にとっての自然な日本語口語のモデルになるという理由で、この「東京ノート」を主教材に日本語聴解・会話を教えています。個人差の著しい聞き取り、聴解練習を個人で行い、スキットをペアもしくはグループで作成し、人前で発表するという学習法が一番効果的であるようです。グループのメンバー同士が連帯意識を持ち、またほかのグループの発表を見ることにより、お互いに学び合うことができるからです。そこで大切なことは、グループの構成を固定させないことでした。いつも同じメンバーと一っしょにスキットを作るのは連帯意識を高めることになるでしょうが、また同時にほかのクラスメートと

の間により深い溝を作る結果にも陥ることになりかねません。さらに、グループを作る際に自分の言語・文化背景と異なる人たちと組むことによって、スキット作りの可能性に広がりが見られます。文化・言語の多様性に触れることが自己発見、他者理解のきっかけとなったようです。例えば、ある学生がおもしろい個人的な体験を報告しています。以前日本人の友人と電話で話していたいやな思いをしていたこと、しかし、いやな感じとだけで何が原因で気分を害したのかわからなかったが、今になってあいつちの多さが原因であることが分かったと言っていました。



ビクトリア大学上級日本語会話受講学生のスキット発表

第3章 演劇作品を使う意義

以上の実践例は、「足場かけ」としての演劇・ドラマ的活動と考えられないでしょうか。つまり、プロによるパフォーマンスをお手本にしてそれをクラスメートと一緒に教師の助けも借りながら模倣することによって、自分ひとりでは到達できないコミュニケーションのレベルに「背伸び」ができるようになるということです。演劇において演出家が、俳優がうまく役をこなせるように指導するように、日本語学習者が実際に日本語を使って、適切なコミュニケーションができるように指導する

ことは、私たち教師の大事な仕事のひとつです。ロールプレイをする場合、その人自身の経験や環境を考慮しなくてはならないと思うのです。「のびしろ」とは、演じる側の想像力の及ぶ範囲のちょっと先、経験してなくても想像すれば、あるいは身体を動かせば経験できそうな領域のことです。そこを刺激するためには面白そうな取っ掛かりを教師は提示しなくてはなりません。日本語を演劇の場といういわば実験場でいろいろ試し、調整して、リハーサルをすることによって本番に臨むという点では俳優も日本語学習者もまったく同じプロセスを経ています。

この試みの詳細については『ドラマチック日本語コミュニケーション』「実践編」をご参照ください。

むすびにかえて

「演じる」とか「演技」ということばは日常生活ではあまりポジティブに受け取られていないようです。しかし、子どものころ、私たちはごっこ遊びやゲームを通じて人間関係について、失敗がゆるされる（どころか楽しみながら）場で「テスト」ケースを体験していました。大きくなってからは学校などで本番さながらのリハーサルを体験します。私たちは意識しなくても演技に関わっているように思えます。広い意味での演技の積み重ねによって、私たちは自分の性格、個性を作り出しています。「演劇」や「ドラマ」という言葉を聞くと、「私には演じるなんてできない、まして演劇なんて教えられない、」と尻込みする方も多いかもしれません。しかし、よく考えてみると、私たちは日常いろいろな役割を演じています。同じAという人が家庭では「妻」や「母」であったり、職場では「教師」、「同僚」であったりして、その役割に適した表現を選んで、ある意味「演じて」います。得意な役割もあるでしょう。またちょっと苦手な役割もあるかもしれません。私個人のことを考えますと一番居心地がい

い役は教師役です。学校、クラスの中で学生さんに対しては普段人見知りをする私でも結構社交的になれます。私たちが社会的な存在である以上、得意、不得意は別として「演じる」ことは日常的な行動です。さらに視点を変えて、私たちが日常行っている「演技」の延長と考えれば、日本語教育に演劇・ドラマ的な要素を取り入れるのは決してむずかしいことではないのではないのでしょうか。

本稿では表現芸術や芸能の中のほんの一部にしかふれませんでした。しかも演劇・ドラマを非常に限られた視点であるコミュニケーション教育への貢献についてお話をいただきました。私が2007年から関わっている国際表現言語学会(注2)は、表現芸術および芸能を言語教育と結びつけるという目的で生まれました。学会活動を振り返ると、表現芸術や芸能のかたち、内容、また言語教育との結びつきは多様で豊かであることがよくわかります。英語落語を聴衆の前で披露するという目標を立てて、子供達を指導している英語塾の試み(注3)や小話を使って日本語学習を行っているアメリカの大学(注4)など、実践例は多種多様です。

表現芸術や芸能は言語教育、もちろん日本語教育を豊かでイキイキとさせる泉のような可能性をひめていると思います。今、この文を読んでくださっているあなたもどうぞ泉を探し当ててみてください!

注1 ヴィゴツキーは、子どもは自分一人では到達できないが大人や仲間と一緒に協同作業を通してなら到達できるレベルの能力を潜在的に持っているとして主張しています。それが「発達最近接領域」の概念です。子どもの潜在的な能力を語るにあたり、子どもの持つ模倣能力について注目する必要があります。子どもは大人や年上の子どもたちといっしょに真似ることによって、子どもが一人でするより、ずっと複雑なことができるようになる、とヴィゴツキーは主張します。

注2 国際表現言語学会(International Association of Performing Language)は芸術、表現、創造性を言語教育の中心に据えようとする教育実践者の支援を目的に設立されました。言語教育関係者以外にも言語表現全般に関心を持つ人々も会に関わっています。

注3 こども英語落語協会は池亀葉子先生、竹田理香先生を中心に児童英語教育専門家が中心となっている会です。プロの落語家である林家染太師匠も子供たちの指導にあたっています。日本各地また海外でも落語を披露しています。(子ども英語落語協会ホームページ) <http://grassroots-edu.com/eetrac-info>



カナダ寄席 こども英語落語の演者たち

注4 初級者からできる日本語学習者による小噺プロジェクト <http://tell.cla.purdue.edu/hatasa/rakugo/rakugobystudents.html>
畑佐一味さんは、Purdue University 教授の他、ミドルベリー日本語学校校長として 柳家さん喬師匠と日本語教育に落語を取り入れるなど新しい試みで日本、日本語教育に携わっていらっしゃいます。



ミドルベリー大学の落語演者たち

前列左から、林家二楽さん(紙切り)、柳家さん喬師匠、柳亭左龍さん、畑佐先生、後列は小噺修行中、ミドルベリー大学の学生さん

参考文献

- 野呂博子(企画、監修、編著)、デントン・ヒューゲル(プログラム作成)、コーディ・ポールトン(東京ノート英訳)(2007).『東京ノート:リアルな日本語を学ぼう!』(日本語学習 CD-ROM 教材) 東京:紀伊国屋書店。
- 野呂博子(企画、監修、編著)、平田オリザ、川口義一、橋本慎吾.(2012).『ドラマチック日本語コミュニケーション:演劇で学ぶ日本語リソースブック』東京:ココ出版。
- Vygotsky, L. S. (1978) *Mind in Society*. Cambridge, U.K.: Cambridge University Press.

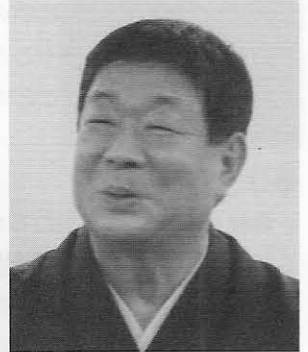
(担当:青木)

「落語、新しいつながり」

2015年2月20日、東京三軒茶屋の昭和女子大本部館の大会議室に、緋毛氈を敷いた高座がしつらえられました。落語界の重鎮・柳家さん喬師匠の登場です。さん喬師匠は日本の伝統芸能である落語を日本語教育に取り入れ、世界各国で日本文化と日本語の魅力を伝える活動を続けています。その一端を今回の公開講座でご紹介いただきました。

柳家さん喬 師匠

プロフィール/やなぎや・さんきょう 1967年五代目柳家小さんに入門。1981年真打昇進。古典の人情話や滑稽話を得意とする本格派として活躍。2013年芸術選奨文部科学大臣賞。他方、日本語教育や伝統文化の浸透にも長年多大な貢献をし、2014年には国際交流基金賞を受賞。これまでに欧州各地、アジア、アフリカでも講演や小唄指導をし、正統的な落語で外国の方々に魅了している。



軽やかな出囃子とともに、黒の紋付で登場したさん喬師匠。柔和な語り口で会場の笑いを誘いながら講演が始まりました。

「外国の方との最初の出会いは、14年前でした。筑波大学の酒井たか子教授からの依頼で、留学生に落語を聞かせたんです。聞かせるだけでは面白くないから何かやってもらおうと、短い落語を覚えてもらいましたが、なかなか笑いには到達できない。で、理屈がなくて笑ってもらえる小唄にしたらどうかと考えました。」

おう、どしたんだ、どこ行くんだい、そんなに急いで。

今泥棒を追っかけてんだ。

おう、お前は町内で一番足が速いからな、追っかけられる泥棒はいい迷惑だ。で、泥棒はどこに逃げたんだい

うん、あとから来るよ(笑)

「この小唄をやった青年は、窓を開ける仕草を、引き戸ではなく開き戸を開ける自国の仕草でやってくれました。日本語を咀嚼して自分の国の唄として演じてくれたんですね。これならいけると思って、それからいろいろな小唄や落語を考えてもら

うようくなりました。」

『「ぞろぞろ」という落語は、店の老夫婦がお客が増えるようお稲荷さんにお詣りしたら、売り物のわらじが天井からぞろぞろ下りてきて商売繁盛。それを見て真似した向かいの床屋では、いくら剃ってもお客の髭がぞろぞろ生えるというオチですが、それをある学生は饅頭屋の話にしました。初めたくさん売れた饅頭がある日ぱったり。見ると町中を糖尿病患者がぞろぞろ歩いていたというオチにしたんです。思わずそれ、使ってもいい? と言いたくなりました。こんなふうに落語も教材として使えるんだなあと思うようになりました。』

「人情唄は果たして外国人にわかるかと思いましたが、『芝浜』を聞いて涙を流す学生さんもありましたし、ある女子学生は『師匠、海が見えました』と言うんです。私は江戸の芝浜を想像してもらえたらと思ってたんですが、聞いている人の心の中にある海でいいんですね。グローバルという言葉がありますが、どの国の人でも感情が共有できるような落語を演じていかなくちやならない

と思うようになりました。」

前半の締めくくりの、日本語教育の力添えをしているようでいて、反対に学ばせてもらっている、という謙虚な言葉が印象的でした。

10分の中入り後、辛子色の着物にお色直しして現れた師匠。後半は簡単な落語講座から始まりました。

「落語の理屈、あるんですよ。日本は、右側が上座、左が下座ってことで、位置関係が身分を表します。ご隠居さんは上座、はっつあんは下座。台詞を言う人によって、向きが変わるんです。子どもと大人の会話ですと、子どもは大人を見上げるように上を向いて話し、大人は下向きに話します。」

声の出し方で遠近を示したり、様々な階層の人々の、煙管を吸う、飴をなめる、そばや饅頭を食べるなどの仕草の実演、磨き抜かれた芸には目を瞠りました。

そしてクライマックスは落語三席。スローモーな男と短気な男のやりとりを描く滑稽話の「長短」、そばの勘定をごまかしたい一心の間抜けな男を描いた古典落語「時そば」、それに人情唄の「芝浜」が演じられました。



250席の会場が満席となった今年度の公開講座では、日本語教育関係者のみならず、落語ファンの姿も数多く見られました。高座の脇には寄席文字の“めぐり”。

【芝浜】：酒ばかり飲んで仕事をしない魚屋が、心を入れ替え商売を再開した矢先、芝の浜辺で大金を拾う。喜んだ魚屋は人を呼んで大盤振る舞いし、自分も酒を飲んで、寝てしまう。折角改心した亭主が大金の着服でとがめられることを案じた女房は、こっそり財布を役所に届けて、すべてを夢の話にしてしまう。三年後、真面目に仕事をし、身代もできた亭主に、女房は、落とし主不明で下げ渡された財布を出して謝る。亭主は事情を知っても、女房を責めず、その機転に感謝する。女房が酒を勧めると、飲みかけた亭主はふいに手を止め、一言「よそう、飲むとまた夢になる」。

最後のオチが決まって、固唾をのんで聞き入っていた会場の皆さんの大きな拍手の中、師匠は高座をおりました。落語を分析するのは野暮ですが、日本人でも外国の方でも、デフォルメされた対比の妙に笑い（「長短」）、そばをたぐる所作に感心し（「時そば」）、そして、万国共通の夫婦の情愛をじわりと感じることができる（「芝浜」）という師匠のメッセージが感じられた演目でした。

一般の参加者には日本語教育と落語の新しいつながりを、日本語教育関係者には本格落語とともに師匠の活動の一端を伝えることができた、「一粒で二度も三度もおいしい」公開講座でした。

〈インタビュー〉さん喬師匠に聞く

——外国の方にどのように落語を理解してもらおうのですか。

事前にストーリーを知らせておくだけでも観客は流れがわかり、驚くほど笑ってくれます。わかりづらい仕草や状況だけをテロップなどで伝えることはありますが、全訳はしません。多少わかりにくくても、日本語で咀嚼してもらおうことを優先します。

人間の情感は万国共通。それをことばという道具で積み上げていくのが言語であり、言語にどれだけ感情を注入できるかで、どれだけ理解してもらえるかが決まるんだな、とこのごろ思います。

——若者の言語表現について心配されていると聞きました。

最近の日本の若者は、スマホなど媒体を利用した情報交換が多く、まともな会話ができないのではと思っておりました。でも、落語を聴いた子どもが、書いたものでなく、直接口で感想を伝えてくれることがあるんです。昔だったら、学校で落語を演じた後は生徒が書いたものを持ってきてくれたものです。それがスマホでしか感情を表せないと思っていた今どきの子どもが、ちゃんとこと

ばで言えるんです。生の落語を聞いて理解できた、それを言葉で伝えられて嬉しかった、そんな喜びを感じます。

——今後の活動についてお聞きします。

日本語教育の場で落語や小噺を外国人の方に全部日本語で理解してもらう必要はないと思っていますが、どう教材として広がっていくかは考えています。

一方で日本文化の伝承として落語を理解してもらうことはこれからも芸人として考えていかなければなりません。例えば、海外在住の知人から「日本人の子どもなのに日本語で笑えなくなっている。何とかしてほしい」という要請があって、6年前からボランティアで何回か行っています。今年もまた行きます。子どもたちは眼を輝かせていましたよと聞いて、ああ、落語はこういうところでも何らかのお役に立てるのだと思いました。

あくまで控えめな語り口ながら、師匠のお話には日本語教育における落語の可能性についての熱い思いが秘められていました。落語で日本語教育のお手伝いをしてはいるが、そのおかげでいつも新しい発見があり、自分たちも落語というものを改めて勉強させてもらっていると語る師匠のお姿は落語界の看板とは思えない若々しいものでした。

（担当：大上・河原・宮内）

小噺プロジェクトの実践 — 楽しければやる! —

落語の前座などで話される短くて面白い話、それが小噺だ。ミドルベリー大学夏期日本語学校校長の畑佐一味先生は、2006年以來毎年、落語家の柳家さん喬師匠を大学に招いて、小噺プロジェクトを展開している。昨年12月の神奈川県における第六回国際表現言語学会大会では、教師のためのワークショップも開催した。「たくさん‘石’を投げて、あれっと思って貰えたことは、取りあえずやってみる」という信条の畑佐先生。編集部では直接お話を伺った。ここにその模様をお届けしよう。

◇ミドルベリー大学 夏期日本語学校

学生：「ああ、困った、難しい日本語のテストがあります。神様、どうか私の日本語を上手にしてください。」

神様：「何でもするか。」

学生：「はい、何でもします。」

神様：「勉強しろ。」



発表会の寄席で、小噺を演じる学生

出囃子になり、舞台に設けられた高座の座布団に、浴衣姿に扇子をもって登場した外国人学生がお辞儀をして座ると、もう客席にはくすくすと笑いが起こる。続いて見事な日本語の抑揚、絶妙な‘間’を取り、表情、仕草をつけて小噺を披露すれば、会場は笑いの渦だ。当の学生は大真面目な顔をして、座布団を返し、お辞儀をして舞台袖へと引き上げていく。

これは小噺活動の最終日、発表会での学生による寄席の一幕だ。外国人学生にも、落語用語でいう

‘フラ’（天分のおかしさ）がある学生がいるという。学生はこんな「本番」と「外からのお客」があると奮起する。ここは全寮制の語学学校で、全8週間の夏期プログラムを実施、コース中は生活時間も含めて選択言語しか使用できない語学漬け教育を実践している。午前が通常語学授業、午後に課外活動があり、学生は興味に応じて活動の一つを選択する。課外活動は4週間入れ替え制で、小噺活動もその一つだ。この活動では4週目最後に学生全員が高座に上がり、多くの観客の前で練習してきた小噺を披露する。これが学生の高いモチベーション維持に繋がっているという。

◇小噺実践指導法

では、4週間の活動の流れを追ってみよう。

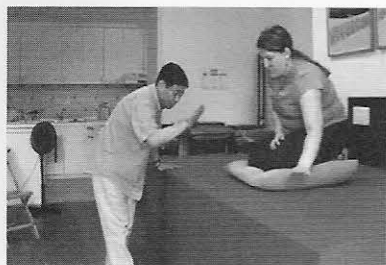
〈1,2 週目〉

◎概要講義：落語の概要を講義し、寄席とは、小噺とはを、それまでの活動ビデオをみせながら少しずつ理解させイメージを持たせる。こうすることで学生は安心感を得る。ただし、同時に創造性を取り去る‘残念感’も生んでしまうこともあるそうだ。

◎実践準備：学生は自分がやりたい小噺を情報サイトから選ぶ。初めは言葉を読んで、面白い、面白くない、と批判するが、面白さは言葉だけではないことを、やがては体得していく。ここではまず暗記をさせる。決して言い淀まないまで覚えることが大切で、恥ずかしさを払拭させるのだ。

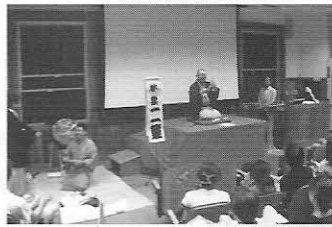
〈3,4 週目〉

◎師匠登場：3週目の終わりに、柳家さん喬師匠と一番弟子の柳亭左龍師匠、紙切り師の林家二楽師匠のご一行が到着し、いよいよ4週目から指導に参加する。初めにさん喬師匠は、落語「時そば」を本物のままの形で演じる。「外国人に分かるようにするのは教師のすること、ここでは何も変えず、‘本物’そのものをぶつける」そうだ。さん喬師匠も、始めはどきどきだったが、学生はちゃんと分かって笑ってくれるという。



学生に稽古をつける柳家さん喬師匠

もう一つ、ここで見せる‘本物’がある。それは、楽屋の舞台裏だ。テーブルと赤い布で高座をこしらえ、その脇にゴザで楽屋を表わし、古タイヤの太鼓を出陣子に、即席に寄席会場の雰囲気を作る。師匠が会場入りしてから高座に登場するまでの舞台裏を、全てそのまま見せる、というわけだ。そこでは、師匠と弟子の挨拶のやり取り、普段着から着物への着替えやその手伝い、出演者が三々五々楽屋入りし、終われば帰っていく様子が、テンポも見事に繰り広げられる。日本人でもめったに目にすることがない、まさに‘本物’の日本文化を裏側から見せることで、特別感を与えるのが狙いの企画だ。



◎実践指導：十分なモチベーションが上がったところで、師匠とお弟子さんが学生の小噺を直々に指導し、発表に向けた稽古に入る。学生は日本語の発音から、間、仕草、道具の使い方、座布団の返し方まで、ひとつひとつ学び、繰り返し体得していく。そして冒頭で紹介したように、コース最終日に大勢のお客様の前で披露してフィナーレとなる。

◇小噺のエンパワーメント

学生たちは、自分が選んだ小噺を、初めは恐る恐る声に出してい

★指導のポイント

1. 注意点

- *言葉をしっかり覚えさせること。
- *大きい声で 発音ははっきりと。
- *落ちついて、ゆっくり話すように。

2. 話を効果的にするために

- *視線を止めると、人がいるように見せる効果あり。
- *上下をきる（右を向いたり左を向いたり登場人物を演じ分ける手法）時は、顔の角度を少しだけ変える程度でよい。 *扇子と手拭いをうまく使う。
- *あとは創造性！答えはひとつではない。



扇子も使いこなして...



「ウキキキ」、猿が携帯で話す!?

たものが、発表の日が近づくころには、どうしたら観客の笑いを引き出すことができるかと真剣に考え始めるそうだ。そこから人に伝えようとする気持ちが芽生え、表現者へと変わっていく。日本語上級者と初級者の枠が取り払われ、力の逆転も起こる。初級者でも上級者より笑いをとり、ウケることが可能なのだ。一般の日本人にもできないことが、外国人に可能になる、それが正に小噺の魅力であり、力であるという。

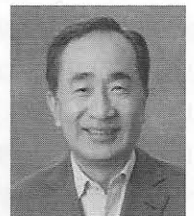
◇小噺を世界に！

昨今の外国人学生の日本への関心は、ひと頃から続くブーム MASK（マンガ・アニメ・スシ・カラオケ）を経て、もっと深いもの、本物へと変わっているようだと言ふ焯佐先生は言う。古いものは若者にウケない、などと言う固定の概念はもはや当てはまらない。日本文化はもっと奥深い、ユニバーサルな感覚を伴っているといってもよいのか

もしれない。今後の活動として、動画投稿サイトなどを利用した、小噺ワールドカップを開催したいという構想があるそうだ。世界各国から集めたい小噺は、もちろん、扇子と手拭い（あるいは、似たようなもの）だけを小道具に使い、座ったままで行う落語のスタイルは守ったものだ。実現すれば、焯佐先生が投げる多くのヒットする‘石’の中でも、万国共通のユーモアに溢れた一つの日本文化として、小噺は一層人々の関心を呼ぶことだろう。

焯佐 一味 先生

プロフィール/
はたさ・かずみ
1955年東京都台東区に生まれる。1980年早稲田大学商学部卒業。イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校在学中の1983年にミドルベリー大学にて初めて日本語を教える。MA, Ph.D (教育心理学)を取得。2001年パデュー大学言語文化学科教授、2004年ミドルベリー大学夏期日本語学校校長に就任。著書に、『日本語教師のためのITリテラシー入門』（くろしお出版 2002年）『第二言語習得研究と言語教育』（共著 くろしお出版 2012年）がある。



こんな外国人学生の様子は、ウェブサイト上に開設された「初級者からできる日本語学習者による小噺プロジェクト」に公開されている。このサイトは、どこの教育機関でも小噺活動を実現できるようにと作られたもので、難易度別小噺集と実践例、柳家さん喬師匠による落語「時そば」英語字幕付き、仕草のデモなどなど、小噺に関する情報の宝庫だ。ぜひご覧になってほしい。

<http://tell.cla.purdue.edu/hatasa/rakugo/rakugobystudents.html>

(担当：小形)